

市民機構レポート：2015年10月31日版



現在の人類は個人個人のビッグ・データを集積するまでにその叡智を進化させて来ています。自然科学における学問もしかり、経済的成長もしかり、更にまた宇宙の神秘を謙虚に解明してく道も確立させつつあります。そして人類の数万年におけるこの地球上での営みは、自然の営み一言い換えれば宇宙の営みとの共存という面からみれば、21世紀の今日必ずしも穏やかな関係とは成りえていないことも、事実として解ってきました。自然と共存することは非常に困難なことのように見えます。

2015年11月30日からパリで開催される地球温暖化に対する国連承認国会議「COP21」も各国の削減目標が提示され、その集計結果では地球温暖化を防ぐことは困難な状況であるという事も判明し、会議の中心議題は更なる削減目標を低減させることで合議を目指して行く事になりそうです。

【緊急課題】2015年10月31日版

狭い地球上に住む我々人類は、今日に至るまで様々な難問に遭遇し、民族、宗教、覇権、経済、政治、など様々な軋轢の中で、解決されえない問題を抱えながら曲りなりにも生存してきました。しかし先進国と後進国の生活格差は依然解消されず、文明のフロントラインでは常に衝突が起こり、第二次大戦後も数々の紛争によって、貴重な命が虫けらの如く殺され続けてきました。

## (I) シリア問題が新たな局面を迎えようとしています

今日の我々日本人にとっても、現在最も心痛める出来事はヨーロッパへと流れ込んでいる難民の方々の姿だと思います。

### ① クルド人



裸足にスリッパを履いただけの彼女は、シリアとトルコの国境近くの町、アイン・アル・アラブに住んでいました。今トルコ国境を漸く通過することが出来、難民施設に行くためにバスを待っているところです。

この写真を撮った友人からの話では、ご主人はISISに連れて行かれ処刑されたということです。彼女はシリア系クルド人だということですが、よく彼女が殺害されなかったと思います。何故ならISISの連中がもっとも嫌がっているのがクルド人女性だからです。

後ろを向いている女の子の表情は判りませんが、彼女も裸足で（移動中は母親に抱かれていたのですが）泣きべそをかいている兄よりは毅然とした姿に見えるのは私だけでしょうか。

イスラームの男性は、女性に殺害された場合は死後も地獄に落とされるとされています。彼女の夫がクルド人であることを隠していたから私は助かったのだと彼女は言っていたそうです。世界に2000万人以上いるクルド人は、イラク北部に多く住んでいますが、トルコから東欧や中央アジアにかけても多く

分布しています。単一民族としては、国家を持たない最大の民族とも考えられています。

イラクがサダム・フセインに支配されていた頃は一方的な迫害を受け、劣化ウラン弾による攻撃を受け、多くの奇形を持った子ども達が生まれました。又、サリンガスをもフセインはクルドの人々相手に散布したという事実も残っています。

現在、クルド人はイラク北部に自治政府を認められ、アルビルに中心都市を得て街を整備し、イラク議会へも議員を送り込み、新たな再生への道を築き始めたところでした。I S I Sが抬頭して来なければクルド人の拠点都市として落ち着きを取り戻していた筈です。トルコ国内にもクルド人は多く、トルコ議会へも数十名を送り込んでいますが、トルコ政府は未だクルド人に対する敵対意識を持ち、明らかにトルコ国境近くのクルド集落（アイン・アル・アラブ＝コバニ）を空爆することもあります。その根底にはオスマントルコ時代に遡る敵対意識が強く根づいているようです。

危機に至るところで経験してきたクルドの人々は、常に民兵の教育を行い、特に女性だけの部隊は男性軍よりも強いと言われています。



男性軍と共に行動するクルド女性兵士

提供：ロイター



②シリアの現実（資料及び写真は The New York Times による）

★図1=デイル・アル・ズール：ダマスカスへ約280マイル

A 2010年12月



B 2014年5月



★図 2 ダマスカスまで 100 マイル

A 2010 年 8 月



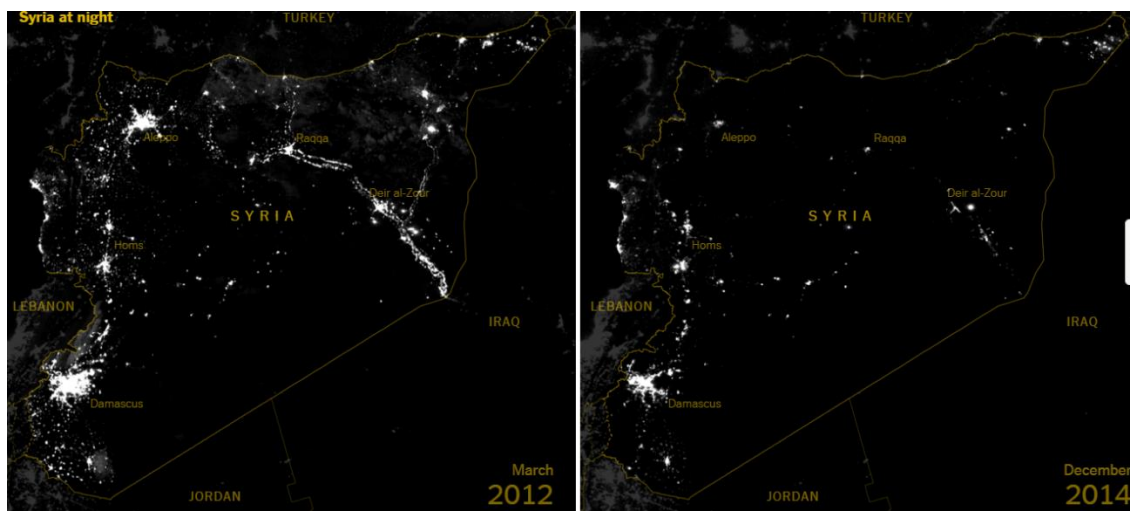
B 2012 年 10 月



完膚無きまでに破壊し尽くされた市街。すべてはアサド政府軍が行った空爆による無差別攻撃の結果です。学校も病院も公共施設も、整備された居住区も、全てが破壊し尽くされています。これらはとりも直さず、同時に多くの市民が平然と殺害され続けたことの明確な証明でもあります。



### ▲シリアの夜景の比較（2012年3月と2014年12月の比較）



### The New York Times

上記画像を含むニューヨークタイムズの記事詳細は下記アドレスからご覧下さい。

非常に素晴らしい内容で、シリアの4年が纏められています。

記事タイトル：Syria After Four Years of Mayhem

<<http://www.nytimes.com/interactive/2015/03/12/world/middleeast/syria-civil-war-after-four-years-map.html>>

|                                |        |
|--------------------------------|--------|
| ◆現在のシリア市民のシリア国内難民となって彷徨っている人々は |        |
|                                | 760万人  |
| 国外難民となっている人々（半数は子供）            |        |
|                                | 390万人  |
| 空爆で亡くなった市民                     |        |
|                                | 30万人   |
| 合計                             | 1180万人 |

シリア紛争が始まる前の国民は約3000万人とされていました。  
国民の約三分の一が苦悩と悲しみの中で日々懸命に生きようとしています。

## (II) ヨーロッパへなだれ込む難民

▲昨日（2015年10月30日）23時頃よりヨーロッパに逃れようとしている難民のライブ映像をオーストリアとクロアチア国境からRTが中継していました。



▲又、アフガニスタンから20日間かけて歩いてクロアチアまで歩いて来たという105才の老婦人のこともRTの記事で紹介されていました。



彼女はより平安の日々の中で生きて行きたいという願いを叶える為にアフガンを出たそうです。17人の子供や孫と一緒に。

### (Ⅲ) シリア情勢に対する国際社会の変化の兆し

このオーストリア・クロアチア国境のライブ配信が突如ワシントンの画像に切り替わりました。日本時間の10月31日1時頃でした。

RTのライブ映像—ペンタゴン：オースティン將軍



米軍がシリアに対ISIS作戦に従事する特殊部隊要員50名を参加させるという報告でした。

私が気づいたのは後半の各記者とのブリーフィング中で詳細は判りませんでした。翌日の記事（アルジャジーラやフランス24等）によると、派遣先はクルド自治政府軍がいる拠点への派遣となるようです。シリア自由軍（FSA）は確固とした拠点を維持出来なくなっており、シリア北部のアレッポからキリス・コバニ辺りを繋げたエリアを行き来しているようです。

拠点としてはアイン・アル・アラブ周辺からラッカにかけてISISと戦いを続けるクルド部隊を支援し、戦闘能力の高い彼らと拠点となるイラク北部アルビルを中心としてISISを弱小化させるのが当面の表だった戦術のようです。ただ実際の戦線へと赴くのではなく、あくまでもアドバイザースタッフとしての立場だと表現しています。

しかしイラク戦争時にも当初は反フセイン：シーア派集団へのジェネラル・スタッフとして300人を派遣したのが始まりでした。

実戦に参加する地上軍を派遣し、アメリカが他国の領土での本格的参戦を回避しようとするオバマ大統領の、ロシア空爆へ対抗する苦肉の策のように思えます。



#### (IV) ウィーン・シリア関係国会議

大展開はその後も続きました。

RTのライブ配信は再び切り替わり、今度は Vienna (ウィーン) のホテル・インペリアル画像に切り替わりました。



ここでは、シリアに関わる12か国の外相や首脳が集まって、シリア問題処理に向けた会議が行われていました。アメリカ：ケリー長官、ロシア：ラブロフ外相があくまでもメインでしたが、そこにサウジアラビアやトルコの外相、他中東関連国が加わり、そしてこのような会議に初めてイラン外相も加わった会議となりました。

会議は7時間ぶっ通しで行われたようです。勿論早々に合意をみるような会議ではありませんでしたが、長くシリアに拘わってきた私とすれば新たな光明が見えたような気がしています。

その第一は勿論ISIS追放・壊滅という目的に対しては参加した中東各国がすべて同意したこと。第二はロシア：ラブロフ外相がシリア・アサド大統領の継続統治を、シリア解決の唯一の絶対的条件とはしなかったということです。

これはプーチンがこれまで言いつづけて来た、「シリア政府軍支援はすべてアサドの為」という前提条件を外したということの意味していると思います。

ラブロフの提案は「**ISIS追放後に、国民総選挙を行い、アサドの処遇はシリア市民に委ねるべきだ**」というものでした。これには勿論アサドが再び大統領に返り咲くという可能性をも含ませていることは確かです。先だってアサド・プーチン会談がクレムリンで行われましたが、プーチンとすれば今まで築いて来たシリアの駐留利権を手放すことは決してないでしょう。

しかし国際社会があくまでもアサドの更迭を望むなら、利権を失わずにシリアと拘わることが出来れば、プーチン大統領にとってアサド政権に拘泥する理由はなくなるのではないかと考えられます。来年再びロシア大統領選挙に打って出るプーチンにとっては、シリアよりも国際社会の評価の方が余程重要なことは明白です。



2週間後に再びこの会議が再開されることでも合意されましたが、今度は国連が主たる開催場所（あるいは会場は別になるかもしれませんが）になるか、他の場所開催でも、主催者は国連になる筈です。

・今回はアメリカ・オバマ大統領は、ロシアが拒否権を行使しない、あるいは出来ない状況を作り出すことが出来ると考えられます。オバマ大統領の任期は後1年ですが、ロシア海軍のシリア駐留を認める内約をロシアとネゴシエーション出来ると思っています。オバマ大統領にとってシリアを平和に導く事は、アメリカ市民のみならず、世界中を唸らせる最後で最大のパフォーマンスになるでしょうし、来年の大統領選挙で共和党に勝利出来る又とない布石になることでしょう。

兎にも角にも、シリアが落ち着きを取り戻し、シリア国内に難民となっている人々が帰還できることこそがプライマリー・イシューな訳ですから、私達NGOを始めとして、世界中の人々がホッと胸を撫で下ろすことが出来るのを願うばかりです。

2015年10月31日

NGO市民プラットフォームジャパン 共同代表 笹岡 哲